

赤いバラ

ナイチンゲールが庭に戻ると、学生が芝生に横たわっているのを見えました。

彼の目は涙であふれていました。

「元気を出して」とナイチンゲールは言いました。

「あなたは赤いバラを手にして、明日の夜、王子さまの舞踏会で、あなたの愛する人と踊ることになるでしょう。私はあなたのために、月明かりで、そして音楽と私自身の心臓の血を使ってバラを作ります。あなたにただ一つお願いするわ、あなたは本当の恋人でいることを約束しなくてはなりませんよ」

学生は見上げて、耳を傾けましたが、ナイチンゲールの言っていることを理解しませんでした。彼は本の中にあることだけを理解したのです。

でも櫛の木は理解して、「君の一番美しい歌を私に歌っておくれ、小さなナイチンゲールさん。君がここにいとなくなると、私は悲しくなるよ」と言いました。

ナイチンゲールは櫛の木のために歌いました。

学生はその歌を聞き、「ああ、この音楽はとても美しいが、鳥が本当に愛のことを理解できるだろうか？ この鳥は上手に歌うけれど、芸術家のものであって、誰もが芸術家は誠実でないと知っている。この鳥は音楽のことだけを考えていて、誰かを助けるために実際に役立つようなことは何もできないんだろう」

学生は起き上がり、自分の家へ行き、ベッドに横たわって眠りました。

夜が来て、月が輝くと、ナイチンゲールはバラの木のもとへ飛んでいきました。

ナイチンゲールは自分の心臓をとげの一つに押し当てました。

一晩中、ナイチンゲールは自分の最も甘美な歌を歌いました。

冷たい、水晶のような月が耳を傾け、ナイチンゲールの血はゆっくりと出ていきました。

バラの木の先端に、一輪の花が育ち始めました。

最初は薄い色で、新しい日の始まりのときのような銀色でした。

しかし木は、「もっとそばへ来るんだ！」と叫びました。

ナイチンゲールがもっと近づき、さらに大きな声で歌うと、バラは銀の鏡に映った赤いバラのようなピンクになりました。

「もっとそばへ来るんだ、小さなナイチンゲールよ」とバラの木は言いました。

「もっとそばへ来い。そうしないと、バラができあがる前に日が出てしまうぞ」

ナイチンゲールがさらに近づき、とげが心臓に突き刺さると、ナイチンゲールは決して消えることのない愛について歌い上げました。

ナイチンゲールは激しい痛みを感じ、声はどんどんか細くなっていきました。

ついに、東の空のように赤い、驚くほどの真っ赤なバラができあがりました。

そして、小さなナイチンゲールは最も美しい最後の歌を歌いました。

青白い月はそれを聞き、東の太陽を忘れて、聞くために空にとどまりました。

赤いバラはその歌を聞き、冷たい朝の空気の中で花びらを開きました。

眠っていた羊飼いたちはそれを聞いて目を覚まし、川はそのメッセージを海へ運んでいきました。

バラの木はその歌を聞き、「ごらん、小さなナイチンゲールよ、ほら。バラができ上がったぞ」と叫びました。

でも、ナイチンゲールは心臓にとげを刺したまま草の上で死んでしまっていたので、それを聞くことはありませんでした。